第 14 回　日本がん・生殖医療学会学術集会
O1-09
水戸、2024.2.10-11

乳がん患者の妊孕性温存治療と温存後生殖補助医療の現状

井上朋子・脇川晃子・森本篤・寺脇奈緒子・北山利江・姫野隆雄・小宮慎之介・浅井淑子・森本義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】乳がん患者の妊孕性温存治療と温存後生殖補助医療の現状と課題を明らかにしたい。【方法】2015 年から 2023 年 9 月までに妊孕性温存治療を実施した乳がん患者の経過と凍結検体の保存状態について後方視的に調査した。【結果】対象期間に妊孕性温存相談目的で受診した女性患者の総数は 204 名で、乳がん患者は 138 名（68%）だった。乳がん患者で胚凍結を実施したのは 43 名、卵子凍結 62 名、実施しなかった（できなかった）ものは 33 名だった。乳がん患者全体の平均年齢は 36 歳（24～47)、胚凍結者は平均 34 歳（24～42)、卵子凍結者は平均 36 歳（26～46）であった。凍結した胚は平均 5.9 個（1～19)、平均採卵回数は 1.8 回（1～6）であった。凍結した卵子は平均 12.3 個（2～49)、平均採卵回数は 1.3 回（1～4）であった。初診日より初回採卵までの日数（中央値）は、胚 16 日・卵子 15 日であった。妊孕性温存胚を用いた移植に至ったのは 16 名で、妊娠 8 名・生産 6 名・判定待ち 1 名だった。温存卵子の生殖補助医療実施者は 3 名で、生産 2 名、1 名は妊娠に至らなかった。3 年以上胚・卵子を保存中の患者はそれぞれ 5 名・25 名で、卵子の方が有意に使用率は低かった（$p < 0.01$ カイ二乗検定)。胚、卵子の最長保管期間はともに 9 年で、保管者の平均年齢は、胚凍結者平均 36.2 歳（30～43)、卵子凍結者平均 38.8 歳（28～49）であった。【考察】乳がん患者に対する妊孕性温存治療の実績は多く、胚凍結・卵子凍結とも治療に必要な日数は変わらず、一般不妊治療と比較しても妊娠率は劣らないことが示された。しかし胚に比較して卵子は利用率が低く、保存期間が長期になる傾向があり、医療機関は保管・管理の負担増大に備える必要があると思われる。